

第3巻刊行にあたって

堤 正典

2010年から2011年の現在において、日本とロシアとの、特に政治的な関係は芳しいものではない。しかし、文化的な交流は着々と続いているように見受けられる。実は、編者のふたりも、2010年9月に勤務する大学の学生とともにモスクワに赴き、日本からロシアに進出している企業を訪問するとともに、ロシアの方々との交流を行なう機会を得た。また、私個人にしても、2010年は、それ以外にも、私がロシアに出向いた際に、またはロシアから来日された方と日本で、あるいは日本にお住まいのロシアの方々、といったように、数々のロシアの方々を知り合うことができ、どの場合も大変有意義な時間を過ごすことができた。その中には、ロシア語学やロシア語教育にかかわる方々もたくさんいた。交流と経験の共有がさらに広がることを願う。

ロシアを知る人材がもっとよいはずである。そのような人材育成に、我々も貢献しているかと言えば、ほんの小さなものでしかない。小さな積み重ねが、やがて…、という風に考えるしかないわけであるし、実際そうなのではないだろうか。この刊行物もそのような積み重ねの小さな小さな一段となれば幸いである。

* * *

2007年10月に続き、2008年3月に第2巻を刊行した『ロシア語学と言語教育』であったが、ここに第3巻を上梓するに至った。前の2巻は、東京外国語大学の中澤英彦教授を代表者とする科研プロジェクト「日露新時代の社会的・言語的現状に対応したロシア語教育文法構築に関する総合的研究」の成果物であった。この第3巻の編者2名もそちらのプロジェクトのメンバーであったが、書名を使わせていただいたことに対して、中澤教授および関係の各位に感謝の意を申し上げます。編者たちはこの書名を引き継ぐことができ、大変光栄に思う次第である。

* * *

実はこの稿を書いている2日前に、東北地方太平洋沖地震が発生した。ようやくその甚大な被害が明らかになりつつある。私自身は勤務する大学において、大きな揺れを感じたものの、研究室にだらしなく積んであった書類等が崩れた程度で、特に被害があったわけではない（ただ、その日は首都圏でも電車等が運行停止となったため、大学に泊まることにはなったが）。しかし、特に東北地方の太平洋側の被害は時間の経過とともに重大さが明らかになりつつある。世界の各国が支援を申し出ているという。もちろん隣国ロシアも支援を申し出ている。